

四季の庭・四季の道

子どもと一緒に植物を見る眼

浅山 英一

日頃幼児の教育に御尽力されている皆様

何かと多岐にわたる部門のことですから御世話のかかることと存じます。今回、花や草木について数回筆を執ることになりましたが、子どもたちと一緒に見る植物はあまりにも多く、その呼び名も取扱いも千差万別です。一を知って十を知るのとえもあることです。ですから植物の区別や取扱いに見る眼を願っております。

いつまでも残る印象

幼い頃に見た美しい草花や荘重な樹木の印象は幾十年経っても記憶に新しく蘇るばかりでなく、その子の一生に大きな影響を及ぼすこともあるのは確かです。

花壇のチューリップやキンギョソウを見たときの小さかった子どもは、大人になって同じ花壇を見るときはもうその視角も視野もかなりちがっているわ

けで、感受性の強い子どもと、ものごとくにあまり動
じなくなった大人とは大きなちがいがあります。

子どもと一緒にものを見たり考えたりする時は、
子どもと同じ状態でありたいものです。そして大人
は長い間に得た豊かな見聞や知識を子どもたちと与
えてやる責任もあることです。

植物と人生とは密接な関係がある以上、大人は植
物の世界を知り自らも学んでおかねばなりません。

ちがいの判る勉強

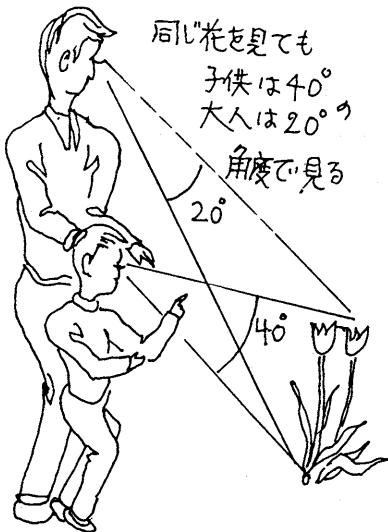
植物にはたくさん種類があるのでその一つ一つ
を見たり学んだりすることは一生かかってもできる
ことではありませんが、似ているからといって同じ
ものだとせず、似ていてもここがちがうのだという
眼を持つことを学ぶのが自然科学に対する態度なの
です。

街の花屋に立寄ったときや公園や野山を歩くとき
その機会を捉えて子どもたちと一緒に草と木のちが

いや同じ草花でも種類や性質のちがいが判るように
仕向けてやることは大切なことです。

植物の世界

火の球として宇宙にあった地球の表面が次第に冷
えて、そこに水と空気ができたことで植物や動物が
発生して今日の世界を作り出したわけですが、植物





A 単子葉類 たねの中に子葉が一枚ある植物 イ

ネ、タケ、ヤシ、パイナップル、ユリ、ヒガンバナ、ヤマノイモ、サトイモ、アヤメ、シヨウガ、ランなど 約四〇科

B 双子葉類 たねの中に子葉が二枚（ふた葉）あ

る植物。圧倒的にこの類の植物は多くあり、これを花びらがバラバラにつくもの（離弁花類）と花びらが合着して筒、袋、壺、ラッパなどの形になるもの（合弁花類）とに区別できます。主なる科をとりあげてみます。



単子葉植物

双子葉植物

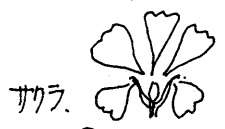


本葉は細長く平行脈が多い

本葉は幅広く網状脈が多い

離弁花類

合弁花類



a 離弁花類

ヤナギ、ニレ、クワ、アサ、タデ、アカザ、ヒユ、オシロイバナ、ナデシコ、スイレン、ハス、キンボウゲ、ナンテン、モクレン、ケシ、アブラナ、ベンケイソウ、バラ、マメ、カタバミ、ミカン、カエデ、ツリフネソウ、ブドウ、アオイ、ツバキ、スミレ、シュウカイドウ、サボテン、ジンチョウゲ、ザクロ、セリなど一三五科

b 合弁花類

ツツジ、サクラソウ、カキノキ、モクセイ、リンドウ、キョウチクトウ、ヒルガオ、シソ、ナス、ゴマノハグサ、ノウゼンカズラ、ゴマ、イワタバコ、キツネノマゴ、アカネ、マツムシソウ、ウリ、キキョウ、キクなど四三科

科と属と種の名、学名

おおまかに似たものどうしの植物をナデシコ科とかヒルガオ科と分類しますが、さらにより似たものを属に分けます。ナデシコ科にはナデシコ属とかカスミソウ属、センノウ属など多数の属があり、その

属をガンピとかセンノウとか種に分け、園芸的には花色や形のちがいで品種に分けます。

ある講習会でウリ科の植物をあげてみて下さいと言ったところ、キウリ、メロンまではまともでしたが、ナス、トマト、トウガラシなどが飛び出してきたので驚きました。ウリのつるにはナスビは成らぬという諺もあるのに全く区別を無視したことです。子どもたちには○○科や○○属という判別は無理なことですが、種の別ぐらいいは判ってほしいと思います。

和名と洋名と学名

どんな植物にも日本名(和名)はついているのですが、外国から渡来したのものには往々その国の名(洋名)や学名のままよばれていることが多くなりました。

学名は世界共通の植物学上の呼び名で、これはギリシャ語やラテン語で属と種を並べてその名となります。

サクラソウ科の植物



ています。プリムラ・オゴニコカとは、誰もよく知っている花の名ですが、たくさんあるプリムラ属のオゴニコカ種ということです。

学名は片仮名ですが通用しない日本名より、反覆練習すればポインセチアとか、シクラメンという種名は子どもたちでも覚えてくれます。

草と木のちがい

植物には草と木があるのですが、草と木のちがいは一口で言えば茎や幹の組織がちがうのです。草はやわらかく木は内側が堅い材木になっています。それでは竹はと言えばこれは草の仲間です。

また、草は短命で、木は長命だとも言えます。いずれもたねから芽が出て育ったものですが、マツやスギの木は幾百年も生きていて江戸時代も明治時代も過して来たものも多くキンさんやギンさんどころではありません。そんな老木や大木を見たとき子どもたちは植物が人間以上に生きていることがわかる

と畏敬の念さえ感ずることでしょう。

サルやイヌが植物のたねをまいたり、植えたりすることはできません。植物を育てることのできるのは人間の特権です。昔から農業、林業、園芸という仕事があり、植物を育てそれを利用して文化をつくり出していることを幼い心に深く刻みこんでいきたいものです。

さて植物の世界を通覧して分類してみました。この基礎があつてはじめて栽培することもおもしろくなってくるわけです。

栽培面から見た植物の種類

植物はたねからスタートして花が咲き、実が成る、このことを実際に行う仕事もいろいろです。

たねまき、植えかえ、鉢植え、地植え、剪定、整枝、繁殖、利用など農業や園芸の仕事をするには植物の性質を一応知っておくことが必要です。

一年草

たねが発芽してから、花が咲き、実を結んでまたたねができ一年以内に枯れてしまう草本類のこと。栽培法によって次のように分けます。

春まき一年草 原産地が熱帯地方ですから春に地温が高くなつてからたねをまいて育てますが、長日期間には育つだけで、花は咲きませんが日が短くなつてくると花が咲く性質（短日性植物）があります。ヒマワリ、コスモス、アサガオ、マツバボタン、ケイトウ、オジギソウ、ハゲイトウ、フウセンカズラなど。

秋まき一年草 温帯地方原産の種類が多く秋に涼しくなつてからまき、冬を越して春に日が長くなつてくると花が咲く長日性植物です。ヤグルマギク、カスミソウ、ヒナゲシ、ストック、スイートピー、

ワスレナグサ、パンジー、ナデシコなど。

二年草

たねが発芽してから一年以上経ってから花が咲い

たあとたねができると二年以内に枯れてしまう草本植物をいいます。 タチアオイ、フウリンソウ、ルナリヤ、ジキタリス、マツヨイグサなど。

二年草は春六月いっぱいいたねをまかないと次年に花が咲きません。

多年草（宿根草ともいう）

花が咲いたあと、地上部は枯れても地中に残った株が次年に再び育って幾年も育つ草本植物のことです。 キク、キキョウ、ホオズキ、オイランソウ、フクジュソウ、シヤクヤク、アヤメ類など。

たねをとってまいても殖やせませんが、親植物と同じものを殖やすには株分けやさし芽で殖やします。

球根植物

地下にイモや球根のできる多年草を球根植物と呼びますがこれもその性質によって春植え球根と秋植え球根とに分けます。

春植え球根 グラジオオラス、ダリア、カンナなどは高温植物ですからふつう四―五月霜が降りなく

なつてから植えつけます。

秋植え球根 アイリス、チューリップ、ヒヤシンス、アネモネなどは十月涼しくなつてから植えつけると翌年の春に咲くようになります。

樹木類（花木類ともいう）

大きく分けて落葉樹と常緑樹に分けます。

落葉樹 サクラ、ウメ、ボケ、バラ、ボタンなどは晩秋から冬の間植えつけます。

常緑樹 アセビ、ツバキ、サザンカ、アオキなどは、春芽の出ないうちに植えつけます。

どちらもたねをまいて（実生）殖やせませんが親木と同じものを殖やすにはさし木、つぎ木などの方法によります。

熱帯植物にも草花と樹木がありますが寒さには弱いので鉢植えにして冬は室内にとりこむか温室やフレームに入れて保護します。

いわゆる観葉植物もあり、草と木は別です。

（園芸研究家）